んだのである。恐らくこの時、日本国民全体がそうであつたと思う。

若しあの時もう少し戦争が長引いていたら恐らく私はこの世に生きていなかつたであろう。思えば無謀な戦争であった。この太平洋戦争で私以上に戦争の悲劇を味い傷つき倒れ、家を失い肉親を失った人々は、敵味方合せれば何千万という数に上るであろう。

「二度と戦争はしない」

「平和に暮したい」

「軍隊は持たない」

痛烈な戦争の悲劇を骨の髄までなめつくした敗戦後の日本人が心の底から誓った言葉であった。

あれから五十年、戦争の悲劇を味った世代が亡くなってゆく中でまたもや目の前に戦車や大砲やミサイルや軍艦や飛行機が、日の丸をつけて動き回っている。あの我々が体験した悲劇、誓った決意はどうなったのか。我が目を疑い我が心を疑う程の変貌振りである。

願くばこれらの武器を使って再び戦争の悲劇を味はぬよう日本人全員が今度こそ団結して政治を監視しなくてはならない。

敗戦の八月十五日が来る度に、我が青春、我が人生、我が命をかけて生き抜いた洞窟陣地のあの暑い夏の光景が、またしても私の脳裏に鮮によみがえってくるのである。